和辻哲郎と津田左右吉（02・02・18）

市倉宏祐（昭17・9文丙）

はじめに

昭和一七年九月に卒業しました市倉でございます。和辻先生が主任教授であった東大の倫理学科にすすみましたが、学徒出陣により一八年一二月に横須賀の海兵団に入団。翌年二月に飛行科の海軍予備学生となり、土浦海軍航空隊に入隊、その後谷田部航空隊、神の池航空隊（何れも茨城県）、再び谷田部に戻ったりしまして、ゼロ戦の操縦訓練を受けておりました。ところが、その途中で、戦局の緊迫とともに特攻隊が次々と編成されて、幾多の同僚が沖縄に出撃してゆきました。我々はその要員として待機しておりましたが、沖縄が陥落した後は、本土防衛の為に兵力を温存することになり、幸いに出撃することなく、終戦を迎え復学しました。卒業後、大学の研究室の助手を経て、専修大学に就職。現在は退職して、名誉教授になっています。

昨年（平成一三年）でしたか、中学校の歴史教科書の採用をめぐって、「新しい歴史教科書をつくる会」によって編纂された教科書に対して、種々の批判が投ぜられました。その経過を見ている途中で、ちょうど戦時中に同様な事件があったことを思い出しました。国粋主義者たちが津田左右吉の史観を激しく批判攻撃して、津田が起訴され、和辻が津田を弁護して法廷に立ったことがありました。何かしら、ちょっと現在の状況と似ているところがあるように感じましたので、このときの津田と和辻のことを、少し紹介させていただくことにします。

津田左右吉と和辻哲郎

和辻哲郎（一八八九―一九六〇）のことは、三高の時によく読まれたこともあり、ご存じのことと思いますので簡単に紹介しておきます。彼は明治二二年に播州仁豊野の村医者の二男として生まれ、姫路中学を経て、一高文科に入学、明治四二年に卒業。同級生に天野貞祐、九鬼周造、三年先輩に安部能成がいました。大正一四年京都大学倫理学科の助教授、昭和九年に東京大学倫理学科教授に転じ、同二四年退官しました。三〇年には文化勲章を受章しています。

もともと若い頃の和辻は友人たちからは、「一見ハデで陽気で快活な才人」ともいわれ

ていますが、他方では「孤独な寂しがりや」とも見られています。彼は必ずしも温厚円満な人物ではありません。一高に一番で入学した飛びぬけた秀才ですが、小学生の頃から周囲に同調しない、へそ曲がりのところがありました。反骨の優等生だったのです。論争をいとわない。皮肉も嫌いではない。谷崎潤一郎がこんな話を伝えています。若いころ、和辻にドリアン・グレイの本を借りたところ、文学的なところより皮肉なところにアンダーラインが引いてあった。和辻自身も、自分が癇癪持ちであることをみずから認めています。彼は学問の世界には妥協は無用と考えていたようです。彼自身の書物は多く先人の研究に対する論戦を含んでいます。いや、書物の上だけでなく、自分がたびたび論争にも登場しています。

津田左右吉（一八七三～一九六一）は、和辻との関係でいいますと、津田が一五・六歳年上です。大正二年に出た彼の『神代史の新しい研究』は画期的な本であったようで、津田の名前はこの本で広く知られるようになりました。三高にいた頃、寮内ではよく見かけた和辻の『日本古代文化』（大正九年）は、津田の『神代史の新しい研究』（大正二年）の批判から出発した本です。私は高等学校のときには津田の本を全く読んでいませんでした。

津田は岐阜県の東栃井に幕臣の下級武士の家に生まれています。東京専門学校［後の早

稲田大学」の邦語政治科の出身で、学校を出てから地方の中学校の先生をやっていました。たまたま、白鳥庫吉（一八六五～一九四一）という、津田より八才年上の東洋史学者の知遇を得て、満鉄歴史地理調査室の研究員になったことが、学者としての津田の仕事が開花するきっかけになったのです。大正六年から早稲田大学の教壇に立ちました。

白鳥は当時から有名な学者で、堯舜は実在の歴史的人物ではないが、彼らを崇拝する伝統が存在したことは事実であるとする歴史観を持っていました。津田ももともとはシナの研究者だったのですが、学者として有名になるのは、むしろ日本の古代史の研究においてであります。

明治政府が採用していた国定教科書は、記紀神話をそのまま歴史として教えていました。津田が主張したことは、記紀は物語を書いた一つの文献であって、歴史の事実そのものを書いたものではないということでした。

記紀は六世紀ごろに、日本の古代政府が制作したもので、歴史的事実を支配者の利害の観点から粉飾して、皇室による統治を正当化したものでしかない。それは特別の意図をもって作られたものであって、一つのフィクションに過ぎない。つまりは、文学でしかないものを、歴史と考えるのはおかしいというのが、津田の主張であったのです。

その後津田は、『文学に現れたる我が国民思想の研究』全四巻（大正五～一〇年）を出

しています。万葉集とか、平安文学とか、或いは禅僧の文章とかは、当時は日本では大変評価されていました。ところが、彼はあんなものは一般の国民生活とは遊離したものにすぎないという立場から、あまり評価しませんでした。

また和辻が『古寺巡礼』（大正八年）で高い価値を認めていた日本上代の佛像についても、津田はこう断定しています。もともと、楽天的であった日本人などに仏教など分かるはずがない。日本の佛像はみな中国の六朝から唐代の作品の模造であって日本民族の創作ではない。

ところが、和辻に言わせるとこうなるのです。一方が他方を真似るとは、両者が独立して対峙していることを前提としている。しかし、当時の日本とシナとはそうした関係にはなかった。日本はシナの東亜文化圏の中の一つの地方でしかない。日本人が形成した文化は一つの随唐文化に他ならないのです。だから、それは内から形成されたもので、外を模倣したものではない。シナの様式は絶えず日本に到来しています。唐の佛像の様式と比較して、和辻が日本の独自性を語っているのは、日本の佛像が唐のものを日本の仕方で純化しているという点なのです。これは薬師寺の薬師三尊などでもはっきりいえることなのですが、今は省略します。

津田が『神代史の新しい研究』を出したのは、彼が四一歳のときだと思いますが、それ

は和辻が大学を卒業して少したった頃のことです。和辻は津田の本に触発されて『日本古代文化』を書くことになるのです。だから和辻は津田を批判することによって、つまり津田の刺激を受けたことによってこの書物が書けたわけなのです。和辻にとって津田とのかかわりは、彼の学問の上からは大きな意味を持っていたわけです。

和辻は生涯日本の古代文化に愛着をもっておりまして、その機縁となったのが『古寺巡礼』であり、また『日本古代文化』であります。これらの書物は和辻の思想の原点といってもいいものなのですが、この点については細かく触れる時間がありませんので省略します。

和辻の津田弁護

津田の研究は学会では高く評価されて、彼はその道の学者として有名になってゆきます。和辻の方もその後『日本精神史研究』(大正一五年)、『風土』(昭和一〇年)、『倫理学』上(昭和一二年)を書いて、次第にアカデミズムに認められることになります。津田は早稲田大学に、和辻は京都大学、ついで東京大学に呼ばれて、その教授になっています。そのままいけば和辻と津田との直接の遭遇はなかったのです。

ところが、昭和の初め頃から、和辻は、右翼に対しては「日本精神」の強調を批判して

いますし、左翼に対しては共産主義に対する反対を明確に打ち出していました。河上肇とも激しい論争をしています。

津田はあまりジャーナリスティックな活動をしない方ですから、ひっそりと独自に自分の細かい研究を行っていましたが、その学問が認められて、昭和一四年には東京大学法学部に呼ばれて東洋政治思想史の講義をしています。

ところが、大東亜戦争の緊迫化とともに、戦時中の国粋主義者たちが津田の書物に注目して、彼を不敬罪、国体侮辱の罪で告訴することになります。津田が古代の神話は歴史ではない、あれは物語に過ぎないといっていることは、神話を本当の歴史だとしている人たちからすると、ひどいことだということになったのでしょう。

他方、和辻の『日本古代文化』は、津田が古代官僚のイデオロギーを読みとったところに、寧ろ古代人の理想や願望を見いだそうとしたのです。二人はほぼ同じ資料を材料として、同様に文献学によりながら、全く別の歴史を描くことになったのです。二人は学問の上では論敵であったのです。

和辻は津田とは立場を異にしていましたが、津田が裁判にかけられたとき、彼の弁護のために進んで法廷に立っています。和辻は自分でも言っていますが、もともと癇癪持ちで、傲慢や卑劣を嫌い、許せないものは許せないとする性分でしたが、一方では優れたものを

認めるのに吝(やぶさ)かでない態度を常にもっていました。彼は激しい気性の持ち主で、時流を笠にきた国粋論者たちに少しも怯んでおりません。学説の違いを超えて真の意味での歴史学を守ろうとした和辻の気迫が（あるいは、癇癪がといいかえてもいいかもしれません）うかがわれます。海軍の真珠湾攻撃の二週間足らず後のことでした。彼は弁護の中で自分の歴史観を展開して、自分とは異なる立場ではあるが、津田の業績が邪な意図を持たない正当な学問であることを論じております。

敗戦によってこの裁判は消滅してしまいますが、津田は後で奥さんと一緒に和辻のところにお礼に行っています。

天野貞祐の『道理の感覚』再版の紙の配給を巡って、高坂正顕がこんな話を伝えています。紙を回すか回さないかというときに、陸軍報道部の少佐の意見。「この書物は盛んにカントの至上命法を語るが、日本では上御一人の言葉が至上の命法である。」和辻一人がこの発言に反対を表明したとのことです。和辻は黙っていられない性分であったのです。

戦後の和辻は保守反動の権化として多くの学生たちに批判されていました。伝え聞いた話ですが、演習の授業中に、進歩派の左翼の学生が一時間くらい演説をしてなお止めなかったとき、和辻はこういったとのことです。「君は私を教えに来たのですか。僕は教わるつもりはありませんから止めてください。ここで勉強する気がなければ、大学をやめたら

いいではないですか」。その学生が黙って出て行ったとのことでした。高山岩男は和辻には「さむらい風」のところがあるといっています。

和辻がフィロロギー［文献学］に見識を持っていたことは、津田を弁護したときにはっきりあらわれています。記紀を文献として扱ったところに、和辻は津田の史学の意味を見て取って、それが正しい歴史の書き方だとしているのです。裏からいいますと、この見解は、記紀をそのまま歴史として捉えた明治政府の歴史学を斥けているわけです。文献として扱うとは、そこの書かれていることが総て事実だとすることではなくて、むしろそこから何が読みとれるかということを問題としているのです。文献学という学問は、一九世紀の中頃から非常に盛んになってきたものです。

文献として読むというとき、津田は当時の日本の政権が自分の立場を正当化するためにうまい具合に話を作りあげていったというふうに考えたのでした。神話の中にこうした意味を読みとったというわけです。

それに対して和辻は記紀を文献として見ることは当然だけれども、津田の解釈だけでは一方的ではないか。和辻は別の観点から文献を読んで、『日本古代文化』を書いたのですが、和辻と津田は文献から歴史を探るという点では、学者としては共通点があるのです。

和辻と津田の違い

では、津田と和辻の歴史観はどこが違うかということをちょっと話しておこうと思います。物語や記録を書き残したのは、津田からいうと、人々が自分の損得や利害得失を計算してそういうものを作ったということになります。これは当然考えられることですが、しかし和辻は別様に考えるのです。

その本が書かれたのは、書いた本人たちが強く心に感じていたことを残したかったからだと考えるのです。例えば大国主命とか天照大神の話にしても、当時の人はそういう神々に対する憧れの気持ちを伝えたかったのではないのか。神々の素晴らしさや恐ろしさを、あるいは喜びや悲しみを。となると、そういう昔の人の感慨を今一度掘り起してみることは、日本の古代の歴史を知る上で大切なことではないのかということになります。和辻はそういう立場に立っています。

津田では、政治経済的な状況から神話がうまい具合に考案して作られた。和辻では、願いだとか悲しみだとか、人間の思いがあって、そこからああいうものが作り上げられたというわけです。解釈の立場は全く違っています。

しかし和辻は、津田が少なくとも単に神話を歴史としてではなく文献としてとらえたと

ころを高く評価して、彼が新しく日本の歴史の扉を開いたということに、賞賛を惜しんでいないのです。

ちなみに、和辻の『日本古代文化』には、日本の古代に対する思い入れが感じられます。『古寺巡礼』を読み合わせると大変に美しい日本が浮かび上がってきます。特に和辻は白鳳を高く評価しています。外国からいろいろなものを受け入れながら、白鳳仏のような作品を産み出した民族の心情をうたいあげたところに歴史家和辻の面目があったのです。

一般的に申しますと、究極的には歴史は物語［ヒストリー history］であり、後代人の推測です。その限り主観的なものであって、端的に客観的なものではありません。だから、歴史は様々に書かれます。違いは何処にあるかといいますと、文献資料の中から何を読みとるかということの違いに由来します。資料が何の為に作られたのかを解釈することが問題なのです。

物語を政治経済に動かされたものとして書くか、人間の内なる心理に左右されたものとして書くかは、歴史家の判断によるものであり、一概には決められないものです。文献のどの点をどう理解し、どう解釈するかで歴史は全く違ったものになるのです。この理解や解釈が歴史家に任されている仕事なのです。津田はそこに古代政府のイデオロギーを読みとったわけですし、和辻は古代人の願いや悲しみを感得したということです。

ですから、資料としての記紀の批判ということになると、歴史的事実という概念が問題になってきます。和辻は歴史的事実というものに、二つの意味を区別しています。

一つは、確実な根拠によって、その実在が確認される事実。例えば、誰かがそのことをはっきり確認しているとか、あるいは多くの人がその事実の証人になっているとか、といった場合がそうです。

いま一つは、これとは違った意味での事実です。その事実を認める人がいようといまいと、その文献資料が残っている以上、それを書き残した人々は何かの事実に驚嘆したり、何かの事件に恐怖したりしていて、そのことを伝えようとしたと考えられるわけです。しかし、そこに書かれている物ごとや事件が本当にそうしたものとして存在したかどうかは分かりません。筆者が思い違いしたり、あるいは意図してそう書き残したのかも知れません。この意味では、その物ごとや事件は確実な歴史的事実とはいえません。確認のしようがないからです。しかし、筆者がそう思ったということ、そのことが一つの事実であるということは、疑いのないことです。

天照大神が実在の人物として存在したことは歴史的事実ではないかもしれない。しかし、高貴な神としてこれを伝え残した日本の上代人が存在したことは歴史的事実です。つまり、書かれている事実が正確なものではなかったにしても、書き残した筆者の観念や感動が存

在したことは、紛れもない歴史的事実です。このことを認めないと、我々が文学を読んで感じた感動などは事実ではないことになってしまいます。

第一は現実の事実の存在。第二は心の中に感じられた想念や観念の存在。何れもが歴史的に存在した現実の事実であって、虚構ではありません。単に誰がどうしたこうしたということを書くことだけが歴史ではなくて、誰が何を思いどう感じたかということを書くことも歴史だというわけです。

歴史というもの

和辻は、当時の日本歴史の学問が大変遅れていたと語っています。歴史的事実のこうした二つの意味を正確に理解していませんでした。ですから、第一の意味で明確に歴史事実と考えることができない場合には、何か理屈をつけて辻褄を合わせようとします。

記紀には神功皇后が魚に助けられて、海を渡って朝鮮半島に上陸したとあります。ところが、こんなことは常識では考えられませんから、魚というのは実は九州あたりの豪族のことだと理解して、それを歴史の事実と考えます。天孫降臨も瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）が天上から来るのはおかしいから、恐らく大陸から渡来したのだと推測する。文献に書かれているそのままの事実は、もとのままでは信じられないことですが、こうすれば理解できると考えるので

す。

しかし、こうなると、古事記や日本書紀の話とはまったく別の話になってしまい、物語が勝手に作り変えられることになります。これは歴史を恣意的に作りだすことで、歴史的事実に手を加えることです。こんな改変を加えない津田の議論の方がむしろ正当です。

和辻からしますと、古事記の作者たちが天照大神を神聖と考えたのは、第二の意味の事実です。しかし、明治政府の歴史観からすれば、この事実が全く見逃されてしまうことになります。

元来、こうした歴史的事実の二つの意味を区別し、それを視野にいれて神話を取り扱ってゆくのでなければ、もはや本当の意味では歴史を書くとはいえないことになります。民族や国家はそれぞれ独自の性格をもっています。その民族の心の中の思想や情感は彼らの歴史の重要な内容です。

和辻の『日本古代文化』は、文献から歴史を推測するという点では、津田と同じ学問的方法をとっています。ただ、何を読みとるかという点では、和辻と津田とは違っているわけです。津田の仕事は確かに神話が歴史であることを否定しました。しかし、明治政府の史観を否定したことは、真に学問としての歴史を開く第一歩を築いたということです。津田は立派な人物だし、まやかしの人物でも何でもありません。和辻は法廷でこういうこと

を縷々論じています。

ただ、政治経済の利害関係から歴史を語れば、この方法はすべての民族の歴史に適用可能です。素朴なマルクス主義者の階級史観は西欧にも日本にも同じ発展段階を認めていました。同様なことは哲学の超越論的な理念から歴史を語る仕方にも見られます。ヘーゲルの歴史がそうです。何れも一元的な歴史観となりますが、しかしこの方法によっては、個々の民族やそれぞれの地方の特殊な文化や思想の意味を十分に捉えることはできないことになります。

和辻が内なる事実の歴史に執着したのは、日本人の特殊な心情やあり方を捉えようとしたからです。これは民族それぞれの個性を尊重したヘルダー J. G. von Herder（一七四四～一八〇三）の歴史観に通じています。『風土』では、和辻はヘーゲルよりもヘルダーを高く評価しています。『古寺巡礼』や『日本古代文化』の独自の古代空間は、『風土』の中の日本の地理空間に繋がっているのです。

歴史家が本当の意味での歴史を書くには、少なくとも二つの資質が要求されます。

ひとつは、歴史的事実の二つの意味を明確に理解する広く冷静な知性や判断。自分の好悪利害に囚われない深く暖かい心情。あるいは、豊かな教養といってもいい。ヘーゲルでは、教養とは精神が自己を疎外して、自己に対立するものに移行することでありました。

教養を積むにつれて、人は自己に囚われることなく他者の立場が分かることになります。

いまひとつは、時流に迎合し、利害を測ることを斥ける識見。あるいは、如何なる状況にあろうとも自己の思想見識を譲らない気骨といってもいいかもしれません。

津田にしろ和辻にしろ、真の学者である二つの資質を具えていました。津田は自説を守って皇国論者に屈しなかった。和辻は四面楚歌の津田を敢えて弁護することを辞さなかった。皇国論者は自己の主張に執着して、他の史観を批判排除した。彼らは国権を利用して津田史学を告発した。津田史観の方法論などが問題ではない。天皇の立場を傷つけたことがけしからないのだ。

こうした言論統制に対して、和辻は真の学問の何たるかを示す立場において行動したのです。もともと、彼は一貫して学問以外の力を使って自説を強要する人々をひどく嫌っていました。津田裁判は、理不尽な強者に迎合しない両者の気骨を偲ばせる事件であったのです。

異なる史観

ところが、戦後になると、左翼史観が主流となり、それ以外の史観を批判排斥することが一般的な風潮となりました。多く階級イデオロギーの観点から一元的に事実の正否軽重

が判定され、その意味づけがなされる傾向が主流となりました。第二の意味の歴史事実もこの観点からのみ取り上げられて、神話や伝承の中に民族の独自な精神を捉えるといった史観は軽視されることになります。歴史教育はもっぱらこうした観点から行われることになりました。神話を事実として見るか、見ないかの違いで、方向は全く逆ですが、明治政府の史観と通ずるところがあるといってもいいような気がします。二つの史観とも自分とは異なる史観を一方的に排除しました。

これに対して、別の史観を採る『新しい歴史教科書』の試みが登場するのは、やっと二〇世紀の末になってからです。この教科書では、神話も歴史の中に入れて考えるとか、日本の戦争も別の観点も入れて世界全体の見地から見直すとか、これまでの教科書とは異なる試みがなされています。

簡単にいってしまうと、戦前の歴史が記紀神話は歴史事実であったという主張を通してきたのに対して、戦後の歴史界の主流は、記紀神話はみんな作り話だから歴史ではないという立場をとっていて、自分たちの観点からそうしたものの意味を断定してゆくことが大勢になっていました。

ところが、「新しい歴史教科書をつくる会」の議論というのは、記紀神話は実際の歴史ではないけれども、そういうものがあったということは事実だから、そこからさまざまな

仕方で日本の歴史を探っていくという立場をとっているのです。ちょうど津田や和辻がそれぞれにやっていった仕方と同じです。

戦前の皇国史観では、大東亜戦争は日本がアジア解放を目指したものとされましたが、じつは侵略戦争であったというのが戦後歴史学の一般的見解となりました。これが定着して、侵略史観が戦後の常識になっていました。ところが、必ずしもこの見解に囚われない『新しい歴史教科書』が現れたものですから、これまで侵略史観を標榜してきたマスコミは、僅かの例外はあったとは思いますが、多くは一斉にこれに反対の態度を取ることになりました。沢山の新聞雑誌が、いわゆる大勢の進歩的文化人たちを動員して、この教科書を激しく批判することになりました。

戦前に、軍部の力を背景にした右翼政治家や右翼思想家たちが津田史観を激しく攻撃したことによく似ているような気がしました。津田は不敬罪で告発されましたが、津田を攻撃した人たちの考え方の中には、津田のような見解を許しては「天皇に申し訳ない」という気持ちがあったような気がします。天皇に対する赤心を標榜していた彼らとしては、当然の思いであったのかもしれません。

この状況に絡めていうと、今度のマスコミによる教科書批判では、「侵略を強調しなければ、中国や韓国に申し訳ない」ということが指摘されていました。左右両翼が異なる意

見を批判攻撃する心情には通ずるものがあるように感じられました。

どの教科書を実際に採択するかの問題では、左翼政党、外郭文化人、教員組合、市民グループが、採択委員などに組織的な嫌がらせや脅しをかけて反対運動を展開していたようでしたが、この様相も戦中に右翼議員、陸軍外郭団体、皇道派哲学者、国粋学生団体が津田を威嚇し脅迫していたことによく似ていたような気がしました。

しかし、戦前にはもともとは論敵であった和辻のような学者が、津田史観の意義を論じて政府の歴史観との違いを明らかにするといったことがありました。が、今度は、和辻が津田を論じたような仕方で、『新しい歴史教科書』の意味に触れたような議論はなかったようでした。学問的な見地から左翼史観と『新しい歴史教科書』史観の違いを解明する試みは全くなされなかったように思いました。

私などから見ると残念なことなのですが、戦後は何ごとにもイデオロギーが優先して、本来の歴史とは何であるのかを正面から問題にする和辻のような学者が消滅してしまったことなのかもしれません。もっとも、反対の意見を持つ人の側からいえば、こうした感慨そのものは、未だに広い視野の歴史などといったものに憧れを抱いている古い教養人の郷愁であるといわれるかもしれませんが。

津田の言動

ここでちょっと、その後の経緯にふれておきますと、戦中津田は不敬罪に問われて、和辻がこれを弁護しましたが、戦後は事態は一変します。戦前の皇国史観の欺瞞を明らかにすることが、一挙に戦後の歴史学の本流になり、戦前に津田が記紀の分析を通じて、明治国家の語る国体概念がフィクションであることを読みとったことは、何よりも高く評価されることになりました。

戦後は多くの進歩的歴史学者が活躍しましたが、その中核をなしていたのは「歴史学研究会」でありました。戦後まもなく、この研究会の再建大会が開かれましたが、そこで津田はその会長に擬せられることになります。就任を要請されて彼は断っています。また、早稲田大学からも総長就任を求められたりしましたが、これにも応じていません。任ではない、というのがその時の彼の弁でした。世評に動じない津田の面目を示して余りがあるように思われます。時流を読んで権勢に与する素早さとは全く縁が無い人物であったのです。

津田のこうした行動は戦前から一貫しています。神話が史実でないと論じただけではありません。国民生活を遊離しているとか、異国趣味の類に過ぎないといった理由で、歴史

上それなりに評価されていた古典文学を断罪していました。こうした彼の見解に「社会主義の影響」を見る論者もいますが、丸山真男の伝えるところでは、彼自身は「唯物史観などは学問とは思っていない」と語っています。彼は彼なりの見識を貫いて、右顧左眄することがなかったのです。

彼は昭和一三年に『支那思想と日本』という本を出版しています。日本と支那の文化が異質なることを指摘して、簡単に二つの文化を包括する東洋文化などという概念に疑問を提起しています。当時は「東亜新秩序」が叫ばれ、久松真一の『東洋的無』〔昭和一四年〕といった著作も出版される時代であったのですが、彼の見解はこうした世間の風潮とは無縁のものでした。尤も、この津田の見解はすぐに、東洋一般に通ずる普遍に盲目であるという批判を受けています。

その頃はまた「神ながらの道」を尊ぶ「日本精神」が強調された時代でもあり、和辻もこの排他性を斥けていたことは先にふれました。津田もいたずらに日本精神の本質を過去に求める論点は異常であり、非学問的であると批判しています。世論など顧慮しない津田の気骨が伺われるところです。

戦後の論壇では天皇制は多く批判されていました。その反対を標榜することが論者の身分を保証するような状況にありました。ところが、津田は雑誌『世界』昭和二一年四月号

に「建国の事情と万世一系の思想」という論文を寄せて、皇室護持を論じています。この頃は雑誌がおおむね進歩的傾向を打ち出してきたときでもあり、この号の編集後記には断り書きが載っていて、天皇制反対の原稿を期待して原稿を頼んだ編集部の困惑が読みとれます。

戦中の学問弾圧についても、津田自身は自分に対する弾圧は民間の右翼によるもので、権力の行為ではなかったと言明しています。戦後の歴史家たちがこぞって日本の朝鮮支配を非難する中で、津田はむしろそれが当然の行為であったと認めています。時流に超然たる彼の反骨が伺われる思いがします。「歴研」の会長を辞退しただけでなく、こうした見解を発表する津田に対しては、進歩的な歴史学者たちは忽ち一転して一斉に津田批判を展開することになります。津田はこうした批判をいっこうに意に介していません。

津田の気骨は何に由来しているのでしょうか。もちろん生来のものであると考えられます。しかし、それだけでは説明しきれないものがあるような気がします。彼は明治政府の史観を斥けながら、皇室を排除していない。寧ろ敬愛しています。

彼の意見では、明治政府がしたことは神代史を歴史とすることで、維新による王政復古を正当化し、天皇親政を近代日本の国家制度としたということになるわけです。これは幕府を倒して、天皇の名において国家を操ることを目指した薩長勢力の企てではないのか。

この勢力は祭政一致の概念によって、一方では天皇を神格化し、一方では天皇の背後で政治を恣にする。天皇親政を唱えて天皇を大事にする振りをする。が、後ろでは自分たちの為に利用する。天皇概念はまさしく薩長政府の隠れ蓑の役割を果たしているということになるわけなのです。

恐らく、徳川の旧幕臣たちは、明治政府には憤りをもっていたような気がします。薩長のあの田舎ものが江戸へ出てきて勝手なことをする。これは幕臣のひとつの感情であったのでしょう。津田も幕臣であったのですから、同様の感情を持っていたのではなかったかと思います。彼は明治維新を評価していません。維新の元勲などはみなくさしています。明治政府の作った教科書などはまがい物ではないのかといった思いがあったのでしょう。

津田は記紀の中に民衆の天皇敬愛の感情を見てとっています。天皇が親政するのではなくて、むしろ政治を官僚に委ねるところに、民衆の中に皇室への敬愛を育くまれることになったのだというわけです。徳川政権のように、政治は幕府に任せて天皇が正面に出ないことに日本の本来の姿がある。記紀を解釈し直し、薩長の偽善を暴くことは、幕臣たる彼の気骨のなせる業であったのかもしれません。彼の反骨は滅びし幕府への思いに支えられていたといいかえてもいいような気がします。

だから、こういう意地というか気骨というか、そういう心情の中で津田は生きていたの

ではないか。性格や気性もあるでしょうが、そうでなければあれだけ徹底して、世の風潮をものともしない態度はなかなかとれないような気がします。

私の友人のある大学の先生で、幕府のご家人の出の人がいます。いまだに幕臣の立場を守っています。箱根から向こうは行く気がしないというのです。私は京都の学校に行っていたと言いましたら、そんなところへどうしていったのか。箱根から向こうは狸の住み家だ、俺の世界はこっちだよ。こう思っている人がいるのです。徳川幕府への親近感を今も持っているわけなのです。

和辻の気風

一方、和辻はどうかといえば、彼は決して硬骨漢といった知識人ではありません。広い視野の教養人であり、優れたものを認めるのに吝かでありませんし、高雅の趣きを具えています。しかし、外見は穏やかですが、「さむらい」風のところがあり、意に沿わないものには決して屈しません。若い時から癇癪持ちでありました。

しかし、二人の頑固さは決して同じではありません。津田は来るものも拒む。我が意に反するものは斥ける。世評に促されても孤塁を守る。和辻は力を背後にした主張を忌み嫌う。「私」にして「公」を装うものに反撥する。時勢におもねり世にはびこる低俗を許さ

ない。行動を伴わぬ言葉、実質なき評判を嫌う。卑しさを斥ける。孤塁を守るのではなく、敵地に乗り込む。

こうした点では、癇癪と狷介の違いはありますが、和辻も津田も共に反骨の持ち主で、時代に同ぜず諂わない気骨を持っていた点では共通しているように思われます。

もともと気骨とは自分の見解を容易には譲らないことであり、外部の圧迫攻撃に怯まないことであり、自分を貫いて妥協しないことであり、必ず筋を通すことです。しかし、二人の気骨は別のところに源を持っているように思われます。

津田の気骨は滅びし幕府への思いに支えられていました。和辻の気骨は天皇を守る気迫を伺わせているように思われます。津田は明治維新を嫌っていましたが、これとは全く違って、和辻の維新への思いは並ではありません。彼は明治維新を高く評価しています。

『日本倫理思想史』の時代区分を大きく理解すれば、こういえるのです。天皇親政の統一下にあった古代日本は、その後は七〇〇年も公家や武家に支配されてきた。が、明治維新はこれを克服して日本の本来の姿を回復したのです。和辻倫理学では「人倫の理法」とは、個を含む「全」が「個」によって否定され、この「個」が再び否定されて「全」に帰る「否定の運動」が継起することです。日本の歴史の過程は、天皇親政が否定されて、私的な政権ができ、その政権を否定して天皇親政に回帰する事態を示しております。まさに

人倫の理法を体現したものなのです。

憂国の思いから、和辻は明治の日本にも種々の欠陥を見てはいますが、彼が日本そのものを貶(おとし)めたことは一度もありません。彼は日本と一体であって、『古寺巡礼』以来、彼の眼差しは常にこの日本へ注がれていました。彼のこうした心情は、昭和一八年に海軍大學で行われた「日本の臣道」の講演にも読みとれるものです。

軍国化の傾向が著しいこの時期に、彼が「臣道」を論じたことは偶然ではありません。臣であることの使命感があったのであろうと思います。津田の幕臣史観に当たるものは、和辻では天皇を守る君臣史観であったといってもいいかもしれません。彼は「臣」を自任していたと思われます。

この点は、のちにふれる吉田茂にもいえることなのですが。この感情が和辻に初めからあったかどうかは不明ですが、戦局に応じて「臣」としての道を尽くす感情が醸成されていったことは十分に考えられるところです。戦後にもこの心情を持ち続けたことが、彼の天皇制擁護論となったのであろうと推測されます。

もともと、和辻は一貫して日本を批判していません。大東亜戦争にもすすんでコミットしています。この戦争が始まった年の学年末の試験には、「大東亜戦争の世界史的意義について論ぜよ」という問題を出しています。勉強して来なかった学生を大喜びさせたとい

う笑い話が残っていますが、そのくらい彼はこの戦争に協力していたのです。

敗戦後沈黙した文化人もおりますが、和辻は逆に積極的に発言しています。岩波書店は戦後『世界』を創刊しました。はじめはこの雑誌はこれまで岩波に関係していた教養人たちが中心になっており、和辻哲郎もそのスタッフの一人でした。彼は昭和二〇年一一月の創刊号に「封建思想と神道」という論文を書いて、明治国家の二つの誤りを指摘しています。一つは、私的な武士集団のモラル（忠義）を国家と国民の公的な関係に転用して、忠君愛国を喧伝したこと（彼の年来の主張）。二つは、天地の生成に関わる神道の教義を利用して、近代国家の天皇を現実の神として扱い、本来の伝統的な天皇統治の意味を喪失せしめたこと、ということでした。

翌年一月に地方新聞に「国民の歴史的総意は天皇によって表現」発表。天皇は日本国家の総意を代表するという見解は、和辻の戦中戦後を通じての一貫した主張でしたけれども、こういう新聞の簡単な文章が呼び水になって、和辻を天皇制支持の反動の権化とする一般の論調が定着してゆきます。大学の中でもそういう看板が出てくることになりますが、和辻はいっこうに怯んでいません。

有名な話では、新憲法の解釈をめぐって、佐々木惣一と論争をしています。憲法は曲折を経て、昭和二一年一一月に公布されました。当時憲法学の権威であった佐々木惣一が

「国体は変更する」を発表したのに対して、和辻は反論しています。

国体が統治権の総覧者のことを意味しているとすれば、今度の憲法は確かに変更といえます。しかし国体の概念は必ずしも明確ではない。政治的意味の国体は正確には政体です。が、日本の国体概念は政治的意味に留まらず、精神的意味をもっています。天皇は統治権の総覧者というより、むしろ国家の全体性を表わすものであり、国民意志の代表者です。国民統合の象徴が天皇であるとすれば、主権は国民にあるといっても、天皇はその国民の主権の表現者であるわけです。ところがこれは実はそのまま伝統的な天皇の概念でもあります。国体の概念は少しも変わっていないのです。和辻はこの論争を通じて、政治的な国体概念を批判することで象徴的天皇制を救おうとしたのだといってもいいかもしれません。

戦後の和辻

戦争が終わったときに、戦争に協力した文化人の多くが田舎に篭もっています。斎藤茂吉は山形へ帰り、高村光太郎は花巻へ行っています。優れた戦争画を描いた藤田嗣治は、戦後画壇に批判されて、こんな馬鹿馬鹿しい国ではやっていられないよ、と言ってフランスへ帰化してしまう。後に東京に戻ってきた人もいますが、篭もるにはいろいろな意味があるでしょう。戦争に負けたら誰だって、敗軍の将兵を語らずの心境で、人前を避けたい

という気持ちがあったと思います。

和辻を田辺元と比べてみると興味深いように思われます。田辺は戦争が終わったときに、京都を離れて信州に篭もってしまい、再び京都に帰ってくることはなかった。彼は引きこもりましたが、戦中から天皇制護持を願っています。戦争の末期には西田幾多郎を通じ、近衛文麿を介して天皇に建白書を出そうとしています。

天皇制を存続させるには、天皇財産を全部放棄して国民に分ける。天皇が無一物になり、絶対無の象徴として存続する。この建白書が本当に天皇のところまで届いたかどうか知りません。戦後の彼は、敗戦後の日本の進路について語っています。キリスト教の愛と、マルクス主義の正義を結びつけることを願っています。和辻はそうしたことは全くしていません。

戦後私も戦争から帰ってきて、先生の研究室に戻ってきたわけですが、和辻は日本批判一辺倒の論調の中で、日本の研究者がいなくなることを心配していました。彼は戦前はユダヤ人があまり好きではなかったように思いますが、戦後の研究室では、その偉大さをよく口にしました。何千年もひどい目にあった亡国の民でありながら、唯一の信仰を守り通している。日本人もユダヤ人のような魂を持たないと駄目だ、というようなことを昼飯の時間に聞いたことがあります。彼は日本の国を存続させるということ、そのことに自分の

命をかけていたような気がします。

戦後の彼は室町時代に非常に肩入れしています。室町時代は民衆が外へ出ていった時代だ、日本はあの気迫を取り戻さなければいけない。進取の気性を抑えたものはよくないと言って、鎖国政策に繋がる林羅山などをひどくくさしています。

この主張に関するものとして、昭和二五年に『鎖国』を出版しています。この本には、「日本の悲劇」という副題が付けられているように、敗戦の反省をふまえて書かれた著作です。前半の主題はスペイン・ポルトガルの南米侵略の話で、コルテスとか、ピサロなどの興味深い行動が語られています。後半は日本のキリシタンの物語です。ザビエルとかフロイスとかいった人たちの文献を引用して、日本のキリシタンは如何に優れていたかを示そうとしているような気がします。日本人は当時のスペイン人よりもまさっていたといった言葉なども引かれています。

六〇〇頁もある大きな本で、日本を元気づけようとする和辻の心が込められているような気がします。ただ、最後に日本が戦争に敗れたのは、エンリケのような人物がいなかったからだと言い切っていることには少し驚きました。そのエンリケというのは、無限に視野を広げるとか、科学的探求を忘れないとかいった志をもったポルトガルの王子で、航海時代当時の世界冒険者たちを育て応援した人です。

しかし、エンリケ一人がいなかったから日本が負けたというのはどうも唐突な感じがしました。和辻ほどのひとが、こんな簡単なことを何故言うのかと疑問に思ったことがあります。気持ちが先立ったからでしょうか。結論が唐突といったことは、逆にいうと論証が不十分ということです。面白い読み物にはなっていますが、和辻の憂国の思いに共感しない人には、馴染めないところがあるかもしれない。その点では優れた著作とはいえないかもしれません。

日本の戦後の行き方については、和辻は天皇制を守れれば、それでよいと言っているような気がします。戦後は、民主主義、マルクス主義、自由主義、実存主義、人道主義など、いろいろなことが主張されましたが、彼は何れも日本の進路に関わるものとして問題にしていません。天皇制だけあれば日本は立ち直れると信じている感があります。

和辻は若いときキルケゴールやニーチェの書物を出していて、戦後も再版していますが、日本の運命に関わらせていません。彼は仏教を一貫して研究してきました。若いときからずっと仏教を研究しているのですけれども、仏教が日本を救うなどということは、戦後一言もいっていません。ただ天皇制護持を論じていただけです。

恐らく戦後の和辻は日本を存続させることだけを考えていたのではないでしょうか。日本を存続させるとは天皇制を守ることです。それが彼の執念であったような気がします。

皇室は排他的ではない。仏教を取り入れている。天皇制は外に開かれているというわけでしょう。仏教を取り入れるけれども、決して自分の独自の魂を譲らない。だから独自の仏教をきずく。しかもそれは単に独自であるだけではない。世界宗教に通ずる信仰を産み出す。日蓮の仏教はイスラム教に、親鸞の仏教はキリスト教に、道元の仏教は原始仏教に通ずる。つまり、特殊なものでありながら、外をとりいれることによって独自の普遍的なものを作り上げていく。これが日本の本来の姿であると考えるのです。

天皇制護持

『日本倫理思想史』（昭和三〇年）でもいっていたと思いますが、国民的自覚を持つと同時に、外に対して常に開かれた気持ちを持つこと、それが大切なことなのです。そうしてそれを実現しているのが実は天皇制なのです。天皇自身が仏教を拝んでいるということは、天皇が究極の最高の神ではないことを示しています。

神話でもそうです。天照大神は究極の神ではありません。究極の最高神はどんな神だかはっきりしません。天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）などがそうなのかもしれませんが、その神の性格ははっきりとは分かりません。天照大神はそれを祀っているのです。尤も、他方では八百万の神々には祀られていますから、天照大神は途中の神であるということになるわけなのです

です。ことを決めるのも、安の河原に八百万の神々を集めて、みずから究極の神に祈るのです。この神は太占でその意志を示すのです。天照大神はこれに従うだけのことなのです。天つ神と国つ神とを仲介しているだけなのです。この意味では、究極の神ではなくて、途中の神が一切を決めているのが、日本のやり方なのです。

こんな立場をとっているのは、世界宗教の中では、恐らく日本の宗教だけではないか。外を取り入れながら、内を守ること、こうした役割を果たすのが天皇なのです。だから、天皇制を守れば、日本は自国を守って、外に開かれた国家になれる。敗戦の情けない事態をのりこえて生き残って行くことができる。和辻はこう思っていたわけなのです。

天皇制は、神格や強権とも無縁な、それでいて外に開かれた体制です。天皇は国民の意志を表現しているのですが、意志は外からは見えません、見えないものを、見える形で現すのには、象徴であるほかはありません。象徴はいわば記号ですから、実際の権力とは縁がないわけです。象徴天皇制が憲法で決まった後では、和辻は「もうこれからは黙っていよう」といった言葉を残しています。その後では、それまでのように天皇制だとか、日本国家だとかといった文章は書いていません。

和辻はいろいろな外国の文献を読んでいて視野も広く、我々から見ると大変な教養人です。けれども、彼は日本の歴史が人倫の理法を実現していると考えています。しかもその

中心になっているのは天皇です。だからこれを否定するような見解は許せない。戦後、あれだけ左翼論調が一般的であったときに、一人で天皇制擁護の論陣を張っているのは、考えようによっては馬鹿な話です。小林秀雄が進歩的文化人を評した言葉を使えば、「利口な奴」のすることではないかもしれません。でも和辻の癇癪が黙っていることを許さなかったということでしょう。

天皇制護持を主張したために、和辻は戦後ひどい批判を受けています。ちょうどそれは戦前の津田がひどい目にあったのと同じようなことであったのかもしれません。

何故和辻はこれほど天皇制に執着したのでしょうか。天皇制はもとより一つのイデオロギーです。ところが、彼からすれば、それは外に開かれ、内を守る普遍の道理であるわけなのです。しかしそうはいっても、それは和辻がそう考えただけにすぎません。でも、見方を変えていえば、和辻を批判する民主主義、社会主義の観点も、じつは近代西欧のイデオロギーです。しかしだからといって、その議論は無意味ではありません。イデオロギーは個別の利害に関わるものではありますが、必ず普遍に通ずる面をもっています。

民主主義もイデオロギーであるが、人間をすべて等しなみに扱う点で、一つの人間的普遍を実現しています。が、世論におもねり、マスコミの権力に踊らされ、多数派の独裁に陥ることも少なくありません。社会主義は正義の実現を図りますが、スターリンの独裁や

官僚主義と無縁ではありません。イデオロギーは普遍に繋がるが、普遍を喪失することもあるわけなのです。

しかし当時の和辻批判は、彼の天皇制護持を反動とする点のみに焦点が当てられていました。でも批判者たちについていうと、自分たち自身のイデオロギーを天皇制と対比して、イデオロギーにおける個別と普遍の関係を正確に問題としたものは、いなかったような気がします。当時はややもすれば、民主主義、社会主義の「赤シャツ」であることで、日本批判の「山嵐」を自任する風潮が全くなかったとは言いきれないところがありました。

和辻が捉えた天皇制には長所もあれば、短所もあります。あるいは、長所は短所と裏腹になっているといってもいいかもしれません。天皇体制には、「陪臣や側用人が権勢を振う体制」や「強力指導者不在の無責任体制」に繋がる面があります。この点は、現代日本の会社経営や、いやもっと大きく日本の共同体一般の運営にも認められると指摘する向きもあるようです。津田の薩長批判はこの点に関係があるような気がします。が、和辻は天皇制のマイナス面には触れていません。彼は敗戦をエンリケの不在に関係付けました。敗戦の責任を指導者の偏執的資質に求めましたが、彼らの権勢と天皇制との連関を分析するには至っていません。事態の分析の甘さを人物への癇癪で停止してしまった感がないとはいいきれません。

ただ、和辻が戦中戦後一貫して日本国と天皇制に執念を持ち続けたことは明らかです。彼の戦中戦後の言動のことになると、日本では天皇制のイデオローグだとか、軍国侵略の賛成者だとか、全部そういう批判になって、だから駄目だという議論が多いのです。

ところが、アメリカの研究者の議論は必ずしもそうではありません。かえって、彼らの方が遙かに公平で視野も広い議論が多い気がします。

一つあげれば、アメリカのある研究者は、和辻の戦時中の「アメリカの国民性」[昭和一九年]という論文についてこういっています。この論文は、日本人の研究者がよく指摘しているように、単に米英の欠点や悪口を言い立てているのではないのではないのか。裏からいうと、じつは彼らのその欠陥が彼らの底力に繋がっていることを警告しているような気がする。というのです。和辻の心中の心情をくみ取っているといってもいいかもしれません。

日本の研究者は和辻の文章に戦意昂揚の意図を指摘するのみで、日本の指導者への警告といった点は全く見ていません。そういった意味ではアメリカ人の方が、深い読み方をしているともいえるわけです。日本の議論がいかに敗戦の屈折を担っているかが感じられます。

もっとも、こうした批判を受けても、和辻は全く意に介していません。ひとえに一貫し

た態度を貫きました。津田の生涯と和辻の生涯とを考え合わせてみると、二人ともが絶対に自分を譲らない、自分を曲げない男たちであったという点で極めて相通ずるところがあったように思います。

和辻の生涯

和辻や津田が遭遇した運命は、戦前戦後の時流一般を示しているともいえるのではないでしょうか。もちろん例外はありますが、全体の風潮としては、戦前は国粋主義が、戦後は民主主義が、いわば一辺倒に大きな力を振るった時代でした。それだけに、さまざまな退廃や屈折が起こってきたわけです。

方向は逆ですが、大きな流れとしては全く同じような生き方が行われていたような点がありました。時流におもねるとか、他人を攻撃批判することで自分を正当化するといったことが起こるわけです。和辻は一貫してこうした態度を嫌っているのです。戦後の彼はこの風潮に馴染めなかったのでしょう。もっとも、この傾向は彼の若いときからのことで、大げさに誉め称えたり、ひどく中傷する人たちを何時もいやがっていました。

唐突ですが、吉田茂にふれておきます。占領時代に首相であった吉田はバカヤローの放言で有名ですが、吉田は学者好きで何人かの学者たちと交流していました。天野貞祐を文

部大臣に起用していますし、和辻もそうした学者たちの一人でした。何回か食事を共にしたこともあったようです。

吉田は当時の日本人を四つに区別しています。「巾着切り」「不逞の輩」「浮浪の徒」「曲学阿世」。巾着切りとは、占領軍にすりより自分の利益をはかる人々。不逞の輩とは、ソ連の意を測って大衆を煽動し社会変革を目指す人々。浮浪の徒とは、現実状況を正確には把握していない社会の多数大衆。曲学阿世とは、大衆の動向に媚びる学者文化人。吉田からすれば、これらの人たちは結果的には米ソの意に沿うことで、自分の利益を計ったり、立場を正当化したり、世間におもねったりする人々であったのでしょう。

吉田は本質的には特権主義のところがありますが、英国主義者ですから貴族的な民主主義者といえるかもしれません。教養エリートの和辻にも似ているところがあるような気もします。いいか悪いかは別にして、二人とも軍人が嫌いな教養人で、曲学阿世を嫌っていたことも共通しています。

朝鮮戦争の時に、国内の共産主義者が蜂起することを危惧した米軍は、吉田に国防軍の創設を求めていますが、吉田は最後まで抵抗して警察予備隊で妥協しています。和辻も軍備を作ることに反対の気持ちを持っていました。二人とも天皇を支持していて、吉田は「臣茂」と称しています。「日本の臣道」を書いた和辻は「臣」の精神を重んじていまし

た。両者は君臣の立場を重んじていたといってもいいかもしれません。二人とも、何か背後に譲れない偏屈な癇癪を持っているところも似ているように思われます。

癇癪持ちではありませんでしたが、譲れない偏屈という点では津田左右吉も同様であったと思われます。ただ。津田は貴族的なところはありませんし、君臣ではなく、幕臣の立場を重んじていましたが。

四面逆風の中で天皇護持を貫くことは、並々のことではありません。和辻自身も自分の無鉄砲さには気づいていたかもしれません。しかし、いわずにはいられなかったのでしょう。もともと黙っておれない性分なのです。癇癪なのか、我執なのか、意見は分かれるかもしれません。この和辻を支えていたものは何であったのでしょうか。

もとより彼は哲学者ですから、気分だけのことではないでしょう。詳しく話す時間はありませんが、簡単にいうとこうなります。イデオロギーは個別の立場ですが、個別と無縁な普遍は抽象的普遍でしかありません。個別のみが普遍たりうるのですから、何れかの個別を選ぶほかはありません。

和辻は天皇制イデオロギーに固執しました。思想的観点からいえば、彼はハイデガーとの繋がりもあり、『風土』や『倫理学』以来既に近代批判の立場に立っていました。民主主義も社会主義も共産主義も近代主義です。だから、近代主義からする日本批判には全く

同調しなかったのです。恐らくそうした動向に馴染めなかったのでしょう。思想家としての立場からいえば、彼は天皇制に繋げることで、自分の年来の近代批判の立場をを貫いたのだといってもいいかもしれません。

もっとも、和辻が最後まで天皇制護持を主張して譲らなかったことは、根本的にいうと戦争の勝ち負けと、思想の動向隆替といった問題に関係しているということでもあり、本質的な哲学の問題としても考えるべきことでもあります。ハイデガーとナチズムの関係、あるいは英米哲学と民主主義の関係などもこの問題にかかわっていることですが、今は省略いたします。

詰まるところ、和辻は敗戦で自分の立場を換える気持ちは少しもなかったわけです。田辺とは違って、戦後の彼はいかなる外国思想にも眼を止めていません。外に繋がり、内を守る天皇制の道理は、西欧の諸々の原理にも匹敵する普遍的原理である。天皇もそうであったが、イエス・キリストも途中の神である。彼は天皇制を介して、自分の西欧近代批判の立場を貫いたのではないかと思われます。

彼の気骨を個人的に支えていたのは、日本国を守る思いであったのでしょう。彼は明治に生まれ育った日本人の誇りを最後まで持ち続けた人物であったような気がします。この矜持に無縁なるものには、彼は単なる反動思想家にすぎないでしょう。

彼の精神の歩みは、当代日本の課題に正面から対峙した思想家の足跡を示しているように思われます。彼は伝統との葛藤を孕んだ明治の文明開化の課題にも、また波乱に富んだ昭和の苦難の転変にも、正直に対面しております。

彼は必ずしも温厚円満な人物ではないかもしれません。自分の癇癪を（逆にいえば、見識をといってもいいかもしれません）存分に生き抜いた知識人でありました。日本の戦前戦後は全く違った国家の様相を呈しております。彼の天皇制護持はこの二つの様相を一つに繋ぐ試みを貫いたものともいえるかもしれません。彼の言動がすべていいとか、すべて悪いとかいうのではありません。むしろ、異なる二つの日本を一つにしようとした歴史的人物として、彼の人生は一人の気骨ある哲学者の一生であったように思います。原稿をお忘れてきまして、話があちこちに飛んだり、繰り返しがあったりして、失礼いたしました。これで終わらせて頂きます。

（専修大学名誉教授）